九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

三宅芳夫著『ファシズムと冷戦のはざまで : 戦後思想の胎動と形成1930-1960

大場, 健司
台灣・國立國防大學語文中心 : 専任教師

https://doi.org/10.15017/4103691

出版情報：九大日文. 35, pp.43-46, 2020-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

三宅芳夫著『ファシズムと冷戦のはざまで――戦後思想の胎動と形成1930-1960』

大場健司（OBA Kenji）

優れた研究者は優れた批評家たり得る。今回、この書評で推薦する三宅芳夫著『ファシズムと冷戦のはざまで――戦後思想の胎動と形成 1930-1960』（東京大学出版会、二〇一九年一〇月）は、優れた研究書としてのみならず、同時に優れた批評として読み得る稀有なエクリチュール（Écriture）だと言ってもよい。日本／フランスの戦後思想のみならず、文学や政治といった広範な学問分野を自由に横断する知の在り方は、刺激的な批評的実践となっている。

本書は『朝日新聞』二〇一九年一二月二八日付朝刊において、書評委員の宇野重規氏によって「今年の3点」に選ばれ、「丸山眞男、竹内好、武田泰淳、三木清、あるいはサルトルについて、評者はこの著者の論文からつねに刺激を受けて考えてきた。それらを一つの展望の下に読めるのがうれしい」と評されるなど、極めて評価が高い。

著者の三宅芳夫氏は現在、千葉大学人文公共学府教授として教鞭を執っていらっしゃる。評者（大場）が三宅氏の著作を最初に拝読したのは、評者の高校時代に遡る。当時、評者は安部公房（一九二四―一九九三年）や大江健三郎（一九三五年―）、ジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-1980）といった実存主義（Existentialisme）の文学／哲学に興味を持っていた。その時、出会ったのが、岩波書店の「現代社会学選書」（二〇〇〇年三月―二〇〇四年三月）の一冊として出版された、三宅氏の御著書『知識人と社会――J＝P.サルトルにおける政治と実存』（岩波書店、二〇〇〇年五月）であった。この研究書では、これまで見過ごされてきた、サルトルの実存主義とアナキズム（Anarchism）、ポストモダン（Postmodern）の関係性が、哲学／文学／政治を横断する脱領域的な視座をとおして新たに提示されており、非常に新鮮であった。この優れて批評的な実践があったからこそ、二〇〇〇年代日本におけるサルトル再評価があり得ただろう。そして、評者に現代思想の新たな一断面を教えてくれ、文学研究の世界へと導いてくれたのもまた、この一冊であった。

かつて三宅氏は、小沢弘明・三宅芳夫編『移動と革命――ディアスポラたちの「世界史」』（論創社、二〇一二年九月）において、「ナショナル・ヒストリー」（National History）を相対化し、「新自由主義グローバリズム」（Neoliberal Globalism）や「近代世界システム」（Modern World-System）に「抵抗」するための、「インターナショナル」（International）な「世界史」の必要性を提起されていた（九―一〇頁）。そして、『ファシズムと冷戦のはざまで』において行われているのもまた、帯の背表紙にあるように「世界史の中で思想を捉える」ことであると言ってもよい。

ここで想起されるのは、柄谷行人（一九四一年―）の『世界史の構造』（岩波書店、二〇一〇年六月）である。評者が『ファシズムと冷戦のはざまで』を手に取った時、その装丁のザラザラとしたカバーから、同じく『世界史の構造』の単行本のザラザラとした質感を思いだしたものである。周知のように、柄谷は『世界史の構造』において、「交換様式」の視座から「資本」（Capital）、「ネーション」（Nation）、「国家」（State）の三位一体に基づく「近代世界システム」を越える「アソシエーション」（Association）を模索した。三宅氏の『ファシズムと冷戦のはざまで』において行われていることもまた、そのような「アソシエーション」の可能性を、戦後思想における「国際冷戦レジーム」への「抵抗」に見いだすことだと言ってもよい。

序章「二つの戦後思想――ユーラシアの両端で――」で示されているのは、「国際冷戦レジーム」への「抵抗」を示す日本とフランスの「戦後思想」を可能たらしめた世界史的なコンテクスト（Context）である。冷戦期にアメリカが「共産主義」（Communism）を「封鎖」するための「前線基地」となったのが東アジアの韓国やヨーロッパの西ドイツであったのに対し、その「緩衝地帯」となったのが日本とフランスであり、そこでは議会制民主主義や共産党の存在も許容されたのだという。柄谷行人『帝国の構造――中心・周辺・亜周辺』（青土社、二〇一四年七月）と関連付ければ、「中心」（米ソ）／「周辺」（韓台、西独）／「亜周辺」（日仏）という構図になるだろうか。本書では一貫して、「緩衝地帯」で花開いた「戦後思想」が、①戦前の「ファシズム」（Fascism）への「抵抗」によって形成されており、それが②「正統派マルクス主義」とは距離を取るもので、③「国際冷戦レジーム」に対抗する「中立主義」の立場から「第三世界」の脱植民地化を支持するものであることが示されている。

このような枠組みを踏まえた上で、次に本書の内容を概観したい。第Ⅰ部「哲学の批判性」で扱われるのは、三木清（一八九七―一九四五年）や竹内好（一九一〇―一九七七年）、武田泰淳（一九一二―一九七六年）、ジャン＝ポール・サルトル、ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）である。ヨーロッパにおいて新カント派（Neukantianismus）的な認識論が国民国家システムを基礎づける言説として成立するが、第一次世界大戦（WWI, 1914-1918）の衝撃によって「認識」の「普遍妥当性」への信頼は揺らぎ、マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）らに代表される存在論への「転回」が生じる。三木清の場合もまた、その「転回」とパラレルな関係にあり、新カント派的「認識」（光）＝「ロゴス」（Logos）には還元不可能な「基礎経験」（闇）＝「物自体」（Ding an sich）を提示しているのだという。更に、三木は「認識」の「普遍妥当性」を「エポケー」（Epoché）するために「ロゴス」の内容が歴史を通じて変化することを示しており、ここにはカント的「カテゴリー」（Kategorie）の歴史化という、のちのミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-1984）らの「エピステモロジー」（Épistémologie）に連なる系譜学的発想があるという。以上のことから、ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）的な「弁証法」（「ロゴス」による「真理」への到達）に基

づく「正統派マルクス主義」との差異が示されている。

次に、サルトルに関しては、実存主義→構造主義（Structuralisme）→ポスト構造主義（Post-structuralisme）という従来の枠組みを問い直しながら、サルトルの他者論や贈与論が、デリダらのポストモダンとの連続性において論じられている。一般的に、サルトルの実存主義は構造主義によって「主体」（sujet）の哲学として批判されてきた。しかしながら、本書がデリダを引用しながら示すのは、むしろそのような「主体」の自明性を問い直す作業が、サルトルによって行われてきたという事実である。内容を簡単にまとめれば、「自己」は「他者」との関係性において出現するのであり、「自己」／「他者」の双方に「認識」の「対象」としては還元不可能な複数性がある。そして「対自存在」（être-pour-soi）は、「他者」によって「認識」された「対象―自己」ではないものとして新しい「自己」を提示する、ということになるだろうか。このように、「独我論」に陥ることなく「この私」という「単独性」を提示するサルトルの実存主義は、「自己」／「他者」の非対称性を肯定するアナキズムの系譜にあるのであり、のちにデリダによる「現前の形而上学」の脱構築へと受け継がれることになるのだという。

第二部「文学の可能性」で主に扱われるのは、竹内好、武田泰淳、荒正人（一九一三―一九七九年）、サルトル、花田清輝（一九〇九―一九七四年）である。まずここで吟味されるのは、一九五〇年代の日本共産党における「対米独立闘争」や「国民文学論争」における「ナショナリズム」（Nationalism）である。一般的に丸山眞男（一九一四―一九九六年）は近代主義的、竹内好は反近代主義的と対比されることが多い両者だが、ここでは両者が共通して「デモクラシー」（Democracy）と「ナショナリズム」を結びつけるという「近代」的な試みを行っていた点が示され、その二項対立は脱構築される。それと同時に、「国民国家」への帰属を自明視した丸山／竹内の思想を相対化するために、武田泰淳が取り上げられる。「国民文学論争」において竹内がアジア的な視座から欧米の帝国主義に対する「ナショナリズム」を主張する中で、泰淳は『司馬遷』（日本評論社、一九四三年四月）で示された「記録」の視座から国民国家の自明性を疑ったことが示される。

更に、雑誌『近代文学』（一九四五―一九六四年）における「主体性」論争や「文学者の戦争責任」論争などを吟味することで、荒正人を中心とする『近代文学』同人におけるマルクス主義との緊張関係が論じられている。従来、荒正人は教条的な「マルクス主義」に対して「ヒューマニズム」（Humanism）を対置した批評家として論じられることがあるが、ここでは、マルクス主義のみならず「ヒューマニズム」や「人間」といった「理念」が不可能となった後の「政治」の可能性を問うたものとして、『近代文学』における言説が論じられている。

次に論じられるのは、『近代文学』一九四九年一〇月号に掲載された花田清輝の批評「革命とプリズム――サルトルとマルクス主義」である。ここで興味深いのは、花田のサルトル受容が「物自体」を媒介にして論じられていることである。すなわ

ち、花田のアヴァンギャルド芸術論における「オブジェ」論と、サルトル『嘔吐』(*La Nausée*, 1938) における「物自体」の発見とが関係づけられているのである。従来、花田がもっぱら政治的にはマルクス主義との関係で論じられることが多かったことを踏まえると、花田と実存主義やアナキズムの関係を論じた本書は画期的と言うほかない。

第Ⅲ部「政治の構想力」で主に論じられるのは、丸山眞男と松下圭一(一九二九—二〇一五年)である。一九五〇年代のマッカーシズム(McCarthyism)を受け、丸山は政治的「転回」を迎え、「自由」と「民主主義」を拘束する「資本主義」こそが「ファシズム」の可能性の条件であることを指摘する。すなわち、「中間集団」が解体することでアトム化した個人が「強制的同質化」(Gleichschaltung)されるのだ。このような「現代」の「ファシズム」に対抗するため、丸山は「自由」と「社会主義」を交差させるアナキズム、特に大杉栄(一八八五—一九二三年)を評価するようになる。本書では、以上のような丸山の議論を引き受けた政治学者、松下圭一による「アソシエーション」論が高く評価されることになる。

以上のように、本書は「自由」な「個人」の「アソシエーション」を目指す「単独者」たちの羅針盤となることだろう。

■目次

序章「二つの戦後思想——ユーラシアの両端で——」

第Ⅰ部「哲学の批判性」

第一章「三木清における「主体性」と「系譜学」」

第二章「三木清における「系譜学」と「存在論」」

第三章「留保なき否定性——二つの京都学派批判——」

第四章「「主体」・「個人」・「実存」——その差異と関係について——」

第五章「来るべき幽霊、或いはデリダとサルトル」

第Ⅱ部「文学の可能性」

第六章「竹内好における「近代」と「近代主義」——丸山眞男との比較を中心に——」

第七章「「鉄の殻」への問い——武田泰淳における「民族」への眼差し——」

第八章「「政治」の不可能性と不可能性の「政治」——荒正人と『近代文学』——」

第九章「外の思考——ジャン=ポール・サルトルと花田清輝——」

第Ⅲ部「政治の構想力」

第十章「丸山眞男における「主体」と「ナショナリズム」」

第十一章「丸山眞男における「自由」と「社会主義」」

第十二章「「近代」から「現代」へ——丸山眞男と松下圭一——」

あとがき

(二〇一九年一〇月　東京大学出版会　四九六頁　五二〇〇円+税)

(台灣・國立國防大學語文中心專任教師)